



国語の授業における「正解」とは

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 市川, 恵幸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000389

国語の授業における「正解」とは

市川 恵 幸

キーワード 国語の「正解」 国語の発問 国語の指導内容 国語の指導言 国語の教材研究
国語の未来像

0 はじめに

国語の授業における「正解」とは何か。

国語という教科に求められていることは、生徒の「言葉の力」を高めることである。ここでいう「言葉の力」とは、言語能力全体を指し、具体的には、言葉による伝達力や認識力、思考力などを含む。そして、これらの能力は授業における教師の発問や指導、あるいは学習集団との協働的な学びを通して高めることが期待されている。

しかし、授業は、授業時間そのものだけで成立するのではなく、その事前事後の取組、そして教師の考え方や姿勢なども含めて成立するものであり、これは「授業づくり」という言葉でくることができる。

そこで、本稿では、生徒の言語能力を高めることができる授業づくりを「正解」であると捉え、以下、そのために必要な考え方や取組を述べていく。

1 国語の指導内容について

まず、国語の指導内容について整理しておきたい。これについては学習指導要領に詳しいが、整理すると以下のア～ウのようなカテゴリー分けが可能である。

- ア) 言葉を使って話したり、聞いたり、読んだり、書いたりするための方法
- イ) 国語そのものの働き
- ウ) 言語文化に関する知識

ア) 言葉を使って話したり、聞いたり、読んだり、書いたりするための方法

他の教科との著しい違いでもあるが、国語という教科は、「日本語を使って日本語を教える」という構造になっている。そのため、生徒にとっては、分かりきっている(と思われる)ことを、なぜわざわざ授業で取り上げるのかという疑問をもったり、実際にその学習の効果が見えたりしにくい、あるいは測りにくい教科でもある。

しかし教師としては、「分かりきっていると思っていたが、授業を通して、より確かに理解することができた」という実感を生徒が持つこと期待している。そして、それこそが授業を行う意義であると考えているのだが、では、そのような授業を行うためには、どのようなことを意識する必要があるのだろうか。二つ挙げてみたい。

一つめは、国語の授業は、表現や理解の仕方といった言葉の使い方を学ぶ時間であるという意識をもつことである。それは、国語という教科を、「内容」教科ではなく、「方法」を学ぶ教科であると言い換えてもよい。この意識の転換により、例えば「言葉の使い方を学ばなくても、日常生活には困ってないし、話も通じるからないから心配ない。だから国語は、漢字の読み書きさえできれば何とかなる。国語の授業は不要ではないか。」といった声や、「国語のテスト問題はフィーリングで解けるので、国語は勉強しなくてもなんとかなる」と考える生徒に対して、国語の授業の必要性を的確に説明することが可能となる。

例えば、物語文から登場人物の心情を読み取る場合、読みも十分でない状況で子どもたちの生活経験を自由に語らせることは、活動あって指導なしという状況に近いものがある。まず表現や文脈に着目し、そこからどのようなことが言えるのかを様々に出し合い、その適否を検討することが大切である。この経験を通して、生徒は「心情の読み取り方」という方法を獲得できるようになる。このようなプロセスを踏まえたのち、自分の生活経験を語らせることで、より確かな言葉の力を身に付け、高めることができるようになるのである。

二つ目は、「分かり合えない」ことを前提とした授業にすることである。

日本国内に住んでいると、「あうん」で通じることが多く、あまり説明しないことがかえって美德であるとされる。これは高コンテクスト文化と言われたり、点の文化と言われたりするが、分かり合えることが前提となっているためである。そのため、言わなくても分かってくれるだろうという、相手に対する甘えもでてくる。

しかし国際化が進む現代において、さまざまなものの見方や考え方をする他国や多文化の人々とは当然

のことながら「あうん」では通じ合えない。したがって誤解を生まないためにも、主語を明示したり、あるいは筋道を立てて説明したり、理由を述べたりすることが求められたりもする。言ってみれば点から線への意識の転換が必要となる。

これからの時代、国語の授業づくりの意識として、「分かり合えない」ことを前提としたものに、意識を変える必要があると考えている。そうすることで、自ずと丁寧に、筋道を立てて書いたり、話したりする必要がでてくるだろう。または、「書かれていないこと」を考えたり、相手の立場に立った例示の適否を考えたりすることにも及ぶだろう。これらは、教師の発問や指導言などによって生徒に気付きをもたらすことができるものであり、その気付きを生徒の言語活動の改善や高まりに結びつけるための方法である。

イ) 国語そのものの働き

これは、日本語の働きや法則など、いわゆる国文法を中心とした事柄を教えることである。しかし、国文法という、どうしても「教え込む」「暗記させる」という指導となりがちである。そもそも「文法」というのは、言葉の規則性そのものを言うのであり、どのような規則性があるかは国語学者によって異なる。学者の数だけ文法「論」があり、いわゆる学校文法では、橋本文法をもとに指導することになっている。しかし重要なことは、橋本文法を理解することではなく、それをきっかけとして、日本語の特質を考えることにある。そこで、その特質を考えるにあたっては、言葉の「違い」に着目し、その違いを説明することが近道である。またその過程を通して、言語感覚を磨くことにもつながる。

例1 「かわいい」と「きれい」の違いはなにか。文法的に説明しなさい。

例2 「雪が降ったから遅刻した」「雪が降ったので遅刻した」の違いは何か。

一般に、学校文法では、「内容」ではなく「形式」に着目することがポイントになっている。いわゆる言葉そのものを捉えるという感覚が求められるが、しかしながら、そのことをなかなか理解させるのは難しい。したがって、例1のような質問をすると、生徒はたいてい見た目や感情表現などを使って説明しようとするが、これは「内容」に着目した説明であり、文法的に説明したことにはならない。あくまでも形式に着目し、文法用語を使って説明することが、文法を学習するうえでは必要になることを改めて理解させるのに有効である。

例2は、「から」と「ので」の使い分けを説明するのであるが、たくさん例を考えさせ、その中から共通項を見つけ出すということを通して、一定の法則のようなものを考えていくことになる。助詞一つで、文意(ニュアンス)が異なってくるという学びを通じて、言葉にこだわりをもつこと、そしてそれは言語感覚を磨かれることになる。

ウ) 「言語文化」に関する知識・理解

これは、漢字の読み書き、敬語や方言、あるいは古文や漢文といった古典作品などを通して、日本人のものの見方や考え方、あるいは伝統文化についての知識、理解を図ることになる。

生徒にとっては、文法の学習同様「暗記」のイメージが強い。漢字の読み書き、敬語あたりは実用レベルでも必要な知識であり、国語を勉強するといえば、まずはここから始める生徒も多い。

一方、古文や漢文などは、教養として学んでおくという要素が大きい。生徒にとっては、なぜ今これを学習しなければならないのかという疑問をもつことになる。しかし、古文や漢文の一節が、ふとした瞬間、生き方の支えになったり、豊かにしたりすることも私たちは少なからず経験していることである。古典には、今も通じる様々な知恵があり、かつて古典の素読や暗唱が教育の中心であったのもそのためだろう。日本の言語文化の継承という観点からも、これらの知識を学んでおく必要はあると思われる。

2 教材研究について

(1) 教材研究は生徒を救う

いつもは挙手をしない生徒が、ここぞとばかりに挙手をし、教師も「おおっ」と思いながら指名する。しかし、その生徒から出た答えは、教師の求めているものとは大きく異なる発言内容である。せっかく本人がやる気を見せたのだからと、その意欲を削がないためにも、露骨に否定するわけにもいかず、どうしたものかといった場面に遭遇することがある。

しかし、本当にこの生徒の発言が、的外れだったのかを再考する必要がある。生徒が発言したのは、何かの言葉や事柄に触発されたからである。その触発されたものは何だったのか。実は、もしこれが、教師の深い教材研究があれば、一見、遠く離れた答えのように見えたものが、実は核心をついた重要な発言であったかもしれないのだ。そして、それを教室全体の子どもたちの前で伝えたとしたら場の雰囲気は一転し、その子どもは一躍羨望の眼差しで見られることになるのだ。

これが「教材研究は子どもを救う」ということである。もちろん、誤答をむりやり正解の方向に誘導して、「よくできました」と述べるというものではない。深い教材研究は、突飛な発言をする生徒にも十分対応できるように備えておくべきものであり、また発言に対して適切な位置付けをすることができることを可能とするものなのである。

しかし、このように教材研究の重要性は理解しつつも、実際に何をどうするのかは教師一人ひとりに委ねられている。また時間も限られているから、指導書を片手に進めるというのが現実的な教材研究の方法であるかもしれない。だが、指導書に書かれてあるのは、執筆者の学級など、任意の学級の生徒を想定した授業展開例であり、そのため教材解釈も執筆者の考えが色濃く反映されている。したがって、自分の学校、学級の生徒の実態とは大きく異なっていたり、あるいは自分の解釈と異なっていたりすることも十分に起こり得る。そしてなんとなくスッキリしないながらも、その指導書に沿うような解釈や授業展開を試みようとする。

しかし、熱意のある教師や研究授業を行うことになった教師は、少しでも自分のオリジナリティを出したいと考える。そしてそのため、教材研究をしっかりとしたいと思う。その結果、授業力の向上に結びつき、同時に生徒たちの国語力を高めることにもつながるのである。

(2)教材研究の要素

教材研究の重要性は分かったが、研究授業や授業検討など、定期的に実践発表の機会があるのならまだしも、そのような機会に恵まれず、中には大学の教育実習以降、取り組んだことがないという教師や、その機会があっても、自分の教材研究について自信がないという教師は多い。

ここからは教材研究の在り方について述べていくが、一口に「教材研究」といっても、そこには複数の取り組むべきことがあり、まずはその要素を整理する必要がある。

私は、教材研究には、以下の5つの要素があると考えている。

- ア 教材の選定
- イ 教材の研究
- ウ 学習者の研究
- エ 指導法の研究
- オ 評価の研究

ア) 教材の選定

教科書を使って授業をすることが求められているのでそうするしかないのだが、多くの教師は意識することなく、教科書に教材が掲載されている理由でその教材を扱う。しかし理想的には、生徒の学習状況を踏まえ、生徒の言葉の力を高めるために、その教材がふさわしいと判断して取り扱うのである。したがって、なぜその教材を選定したのかを、イ以下の内容も踏まえながら答えられるようにしておくことが必要である。

イ) 教材の研究

例えば「読むこと」領域であれば、その文章については、少なくとも文章構造図を作成するなどして文章の特徴を掴む必要がある。文章構造図については、どの観点から文章を見ていくかが最初の課題となる。

説明的文章であれば、論説文なのか説明文なのかをまず判断し、論説文であればどこにその主張があるのか、また説明文であれば、何をどのように説明しているのかをまとめる。主要語句の連鎖や接続表現がどのような展開をしているのかを観察したり、あるいは課題設定とその解決がどのような関係になっているか、あえて筆者が書かなかったことは何かなどに着目したりすることが必要となるだろう。

また、文学的文章であれば、韻文なのか散文なのかを判断し、登場人物の設定(なぜ、その人物を登場させたのか)、文末表現や出来事の展開、情景描写や行動描写などに着目し、それらを一覧にしてまとめることが必要である。

文章構造図の作成することで、文章の特徴というのがよく見えてくるし、その特徴を踏まえて、授業を組み立てることができるようになる。一番時間と労力がかかる研究となるが、この過程を経たものとそうでないものとは、経験上、授業の深さと広がりには大きな違いが出てくるのである。そしてそのことが、前述した「生徒を救う」ことに繋がるのである。

ウ) 学習者の研究

生徒の学習状況とは、生徒の国語の学習、特にその単元(領域)に関する関心や理解に関わる状況であり、一部の学習指導案に見られるような「この学級は明るく元気が良く、発言もたくさんする」という漠然としたものではない。これについては、事前のリサーチなどによって把握することもできるが、第1時の初発の感想などから、生徒の学習状況を把握することも可能である。ここで大切なのは、生徒が「分かっていない」あるいは「分かっている(と勘違いしている)」ことは何かを把握したり、読みの傾向などについて把握したりすることである。そうすることで、発問を考える際に、すでに分かっている問いを分かっている生徒に投げかけることもないし、どのような誤読の可能性があるのかなどを事前に把握できる。そのためには、初発の感想で、実際に何を書かせるのかがとても重要である。例えば「分かったこと／初めて知った(気づいた)こと／よく分からなかったこと」に分けて書かせたり、「共感する登場人物／共感できない登場人物」に分け、その理由を書かせたりするなど、観点を絞って書かせることが有効である。

エ) 指導法の研究

ア～ウを省略して、学習に必要なワークシートやプレゼンテーション資料といった教材教具の作成をしたり、タブレット端末のソフトを駆使した指導を取り入れたりなど、ここから取り掛かることもあるだろう。確かに何度も取り扱ったことのある教材であれば、それなりにその教材に関する内容や指導の効果なども頭に入っているので可能であり時間短縮にもなる。

しかし、改めて丁寧に教材研究をすることによって、新たな気づきを得ることも確かであり、これまでの教材研究が甘かったということに気づかされることもある。指導法については、それ単体で存在するわけではなく、ア～ウが基盤にあることは言うまでもない。

また、教材教具やタブレット端末のソフトなどの活用は、学習活動を充実させるための補助的な手段であり、あくまでも学習目標の達成に向けたものである。目的と方法を間違えないようにすると同時に、様々な実践を見たり、教育や経営に関する書籍を通したりして新たな活用の情報を得るなど、日頃から情報のアンテナを高めておきたい。

オ) 評価の研究

中学校で「評価」というと、それは「評定」のための評価に直結するものとして考えてしまいがちである。しかし、いきなりそのような評価(総括的評価)があるのではなく、その過程における評価(形成的評価)の積み重ねが総括的評価につながるのである。言ってみれば、形成的評価の積み重ねによって、生徒の学びを広げたり深めたりし、最終的にねらいにどれだけ近づいたかを評価するのが総括的評価であり、それが評定につながる評価となるのである。

形成的評価は、生徒の学習状況を踏まえて行われる評価であるが、その精度を上げていくことが重要である。この評価は、授業の目標や発問のねらいなどと連動し、それらの目標やねらいなどに対して、どの程度近づいているのか、あるいはどの方向にあるのかについて、発言した生徒はもちろん、学級全体にも提示するものである。これは後述する「指導言」に関わるものであるが、これによって生徒の思考をより深めるのに役立つことができる。

同時に、これらの評価は、教師自身の指導に対する評価にもなる。つまり「このクラス、平均点が低いから」などということを平気で述べる教師は、それを裏返すと「私はこのクラスを平均点以下しか指導できていません」と宣伝しているのである。そのことについて、「では、どのように改善するのですか」と問われた時、その改善策をきちんと述べられるような教師を目指したい。

(3) 教材研究をイメージする

ここからはそれらを具体的にイメージするための説明を試みる。

あなたは山登りのツアーコンダクターである。そこで、あなたは一週間後、十人のツアー客を連れて羊蹄山登山ツアーを実施することになった。あなたはコンダクターとしてどのような準備をするか。

まずは、どのような山であろうとも、そのゴールは参加者全員が頂上に無事に到達し、また無事に帰還することである。そのため、どの山が最も適当なのかを吟味する必要がある。(①)

そして、目指す山が決まれば、その山がどのような山なのか、その特徴を調べることになる。それは、例えば山の高さであったり、斜度であったり、山道の状況(岩肌がむき出し、登山道がある…)といったことはもちろん、気候や天候などである。できるだけ詳しく調査し、その特徴を正確に捉えておくに越したことはない。(②)

では、参加者の状況はどうだろうか。もしかしたら全員がベテランということもあるし、全て後期高齢者かもしれない。または、トレイルランの下見というニーズもあるかもしれない。このように参加者の男女比、登山経験、年齢構成などのほか、ニーズや健康状況などといった、参加者の調査はもちろん必要である。(③)

さらに、これら踏まえ、全員が目的を達成するために、具体的にどのような方法、ルートにするか考える必要がある。例えば、その山の形状が一見急斜面が多そうに見えても、迂回しながらも緩やかな登山道をとおっていけば初心者でも山頂までいくことができるだろうし、あらかじめ設置されているロープを垂直に登っていても山頂まで登頂可能なかもしれない。またはこまめな休憩を取り入れることで無理なく登っていくことも可能となるかもしれない。(④)

さて、あなたはこのツアーを2時間で登頂する計画立てた。しかし、2時間後の状況を確認すると、すでに登頂してしまっただけで退屈そうにしている人が数名、真ん中あたりで動けなくなっている人が大半、そしてまた4合目までしか登っていない人が数名いた。このような状況で、あなたがまずすべきことは、真ん中あたりで動けなくなっている人や、4合目までしか登っていない人はもちろん、すでに登頂してしまっている人にも何らかの手立てを講じる必要があるだろう。また新たなルートの選択なども今後は視野に入れなければならないだろう。一方、ツアーを開始して半分からの時間でほぼ全員が登頂してしまうような状況であれば、山の選択やその方法が間違っていたのかもしれないと考え、同様に、新たなルートの開拓などを進めるかもしれない。このように、参加者の状況を通して、参加者そのもののレベル(=満足度)を評価し、同時に、参加者の状況は、コンダクター自身としての反省材料にもなる。(⑤)

山登りのコンダクターとしての取組(①～⑤)をいったん整理してみると、次のようになる。

- ①山の選定
- ②山の調査
- ③ツアー客の調査
- ④山登りの方法、ルートの調査
- ⑤参加者の状況

そして、これを教材研究の在り方(ア～オ)と重ね合わせてみると次のようになる。

- ①—ア 教材の選定
- ②—イ 教材の研究
- ③—ウ 学習者の研究
- ④—エ 指導法の研究
- ⑤—オ 評価の研究

3 発問について

授業は、教師の発問(投げかけ)を軸として、生徒の発言に対するコメント、アドバイス、指示などを駆使することによって進められる。これらは、生徒の思考の幅を広げ、深めるための、重要な「仕掛け(=ツール)」となる。そして、授業が上手な先生に共通しているのは、これらの精度が高いということである。ではその精度を高めるにはど

のようなことが必要になるのか。私は、以下の4つの要素があると考えている。

- ア 文言を練り上げること
- イ 問いの構成を考えること
- ウ 魅力ある問いを目指すこと
- エ 答えの範囲や方向性を考えること

ア) 文言をねりあげること

特に年数の浅い先生に見られるが、ある発問に対し、生徒の反応が悪いと、生徒がその問いの意味を理解していないのではないかと心配になり、問いの言葉を次々と言い換えながら発問するといった、いわゆる問いの乱発をしてしまうことがある。意識としては、同語反復のつもりなのだが、それを繰り返せば繰り返すほど、実は少しずつその内容にズレが生じ、さらに生徒が混乱してしまうという状況になっている。やはり、一度の発問で、生徒がその発問の意味や意図を理解できるようにすべきであり、そのためには、発問の文言について、それが生徒にとって理解でき、かつ何をすべきか明確になるよう、練り上げていく必要がある。

イ) 問いの構成を考えること

問いのねらいにも関わるのだが、それぞれの発問が、全体の中のどのような位置づけになっているのかが明確でなく、問いの羅列に終わってしまっているものがある。問いは、その場限りの問いの羅列ではなく、全てが「ねらい」に標準を合わせた、意図的、計画的なものとするべきである。そのためには、「問いの構成(構造)図」のようなものを作成するのが望ましい。

問いの構成図を作成することによって、問いの目的や方向性が明確になるだけでなく、問いの内容や回数などの適否も精査できるようになる。問いはできるだけ少ないほうが、何をすべきかが明確になるだけでなく、授業自体もしっかりとした方向性を持つものとなる。

ウ) 魅力ある問いを目指すこと

魅力ある問いとは一体どういう問いなのか。簡単に言うと、子どもの学習意欲を喚起させ、それを持続、継続させるものであり、問いが新たな問いを生むような問いの設定、内容、そして構成によって、子どもたちは自ら学びを進めていくことができるものである。特に現行の学習指導要領において主体的な授業づくりが求められていることを考慮すると、この魅力ある問いを目指していくことは必須とも言える。

しかし「生徒にとって」というところがかなり難しい。生徒にとって魅力ある問いを創出するためには、教材の研究や指導の研究などを丁寧に取り組むことで、少しずつ見えてくるものなのかもしれない。

エ) 答えの範囲や方向性を考える

授業中の発問やテストの設問について、どこまでを「正解」の範囲とするか。これは実は簡単なようで難しい。それは、国語のテスト問題、特に記述問題の採点をするときにも感じることである。それらは、問いの意図にも関連することだが、文言の完全一致まで求めるのか、それとも方向性が正しければよいのか、あるいは、全く自由な発想に任せるのかということを、教師の側で予め考えておく必要がある。また、場合によっては生徒にもその方向性を示しておくことで、生徒自身が発言の見通しをもつことができ、より創造的な発言につながることになる。

4 国語の「指導言」における正解

指導言は、生徒が発言した後に加える教師の一言である。そしてそれを支えるのは、教師の「コメント力」である。一般に、指導言とは、一見すると補助的に用いられるようにも感じられるが、その重要性においては、実は発問と同等あるいはそれ以上であり、教師の指導力の質もこの指導言によって測られるといっても過言ではない。つまり、ここに教師の力量の全てが集約されているといつてよい。

指導言は、以下のア～ウの役割をもつものであり、それらをできるだけ短い言葉でしかも核心についてコメントすることが大切である。また、そのコメントの根拠は、単元の目標や発問のねらいであり、そのベクトルは生徒の言

葉の力を高め、授業の推進力となり方向づけるものである。

- ア 発言の評価
- イ 発言の整理
- ウ 発言の補足

ア) 発言の評価

子どもの発言に続いて、教師が発する指導言には、さまざまな内容やレベルのものがある。コメントもなく「はい、次」というのは最低のものであるが、「いいね」や「そういう考えもあるね」といったものもこれにほぼ等しい。教師の一言は、実は発言した子どもにはもちろんのこと、教室全体にとっても有益な「評価言」なものでなければならないという意識をもつ必要がある。

良くても悪くても「いいね」とか「そういう考えもあるね」というように返すのではなく、何がどう「いい」のか。あるいはもっとよい答えがあるとすれば、何をどう答えればそれが実現するのか。つまり、具体性と方向性をもった一言にすることが、評価言としての成果をもつことになる。また、同時に生徒の心に深く刺さるような印象的な言葉を、できるだけ端的に投げかけることが大切である。併せて生徒の発言内容を、それまでの発言の中において、どのような位置にあるのか、という位置付けを示すことが必要となる。

イ) 発言の整理

「何を、どう問うか」ということによって、子どもの発言内容も左右されることになるが、特に幅の広い考えなどを求める問いのときなど、多種多様な発言がしやすい。そのような複数の発言が出た場合に、これを教師の側で整理して示すのは、授業を方向づけるうえでも有効である。ピッタリ同じ発言内容ということはありません。ただ文言やそのニュアンスが異なるのであれば、上述したように、どこがどのように同じで異なるのかを示す必要がある。

発言の質の違いについて整理するのは難しい。似て非なるという発言もあるが、その方向づけについては、それぞれの発言が、どちらの方向を向いているか、あるいはどれほど近づいているのかということを示す「ベクトル合わせ」も有効である。このベクトル合わせについては、特に、正解に幅があるものや発言内容に大きな差がある場合に有効であり、それを示すことで、一見誤答だと思われる発言が、実は、核心をつく重要なものであることを理解させることにも繋がり、授業の逆転現象というものが起こるものにもなる。

ウ) 発言の補足

あまり上手に説明できなかつたり、言葉足らずの生徒の発言に対して、全体の理解のために、教師の側で言い換えをしたり、あるいは補足したりするときのものである。実際どのような点が不足しているのかを明確かつ具体的に説明にすることで、発言した生徒のみならず、それを聞いている生徒にとっても効果は大きい。

一方、気をつけなければならないのは、生徒の発言内容と、正解との間に距離がある場合に、正解まで誘導的になってしまうことである。実際、発言した生徒の理解がそこまで進んでいないにも関わらず、その生徒がその正解にたどり着いたように見せかけるコメントは、正解のみを丸呑みしてしまう結果となりえるからである。

5 これからの国語教育にむけた提案

社会や教育を取り巻く環境が目まぐるしく変化する状況において、数年後の国語教育の在り方を考えるのさえ難しい。しかし、ICT 機器を駆使し、個に応じた学びがより推進されるようになると、やがては学習そのものが「学校」で行わなければならない必然性は失われることになる。その必然性がなくなれば、登校は不要となるので、不登校生徒数が実質0になるというメリットはあるものの、一方でデメリットとしては、心身の成長が著しい時期に、対面によるコミュニケーションの場が担保されず、社会性が十分に発達しないことが挙げられる。

そうならば当然、教科の再編成というのも起こりうるだろう。なぜなら、リアル社会とネット社会では、必要とされる能力などが異なってくるからである。そうなると次に問われるのは、「そもそも国語という教科は必要なのか」ということである。なぜなら、国語という授業は、生徒たちに言葉の力を高めるのにどのように貢献しているのか明確ではないからである。多くの人は、「国語は大切な教科だから」という。確かに伝達や思考、認識などは言葉を通して行われるものであり、その力を高めるのは国語科の役目だと考えられているからだ。しかし、本当に言葉の力を高めるような授業になっているのか。そしてそれはどのようにして図ることができるのか、という問いに答えるのは難し

い。やはり明確に「そうです」という根拠が必要である。

繰り返しになるが、国語教育の役目を一言で表すと、「言葉の力を高めること」である。学習指導要領がどんなに変わっても、国語が国語の授業として成立するためには、言葉の力を高めること抜きでは成立しない。

最近行われている授業を観察すると、国が積極的に推し進めていることもあり、多くは、タブレット端末を積極的に活用し、よりリアルに、より即時的に、そしてより協働的な授業展開が可能となっている。かつて、付箋やミニ黒板などを使って取り組んでいたことが、今やキーボード上で可能となることなど、少なくとも 10 年前の筆者には想像すらできなかったことである。今後さらに生成 AI がこれからもさらに急発展していくことを考えると、例えば ChatGPT などを活用により、文章を書くことすら、それに任せるということも考えられる。実際、教師(校長)の中でも、すでに挨拶文などで活用しているということも耳にしているし、出来上がった文章の質も高い。

しかし一方で、これを国語教育という立場から考えてみると、ChatGPT のようなものの安易な活用は、言葉による表現力や理解力の低下などを引き起こしてしまうのではないかという危惧があるため、子どもたちの活用については、慎重にならざるを得ない。しかし、国語の授業において一切、活用しないと断言するのも勇気がいる。むしろ、どのように活用することが、国語教育にとって有益かを考えるべきだろう。

そこで視点を少し変え、ChatGPT ができなくて、人ができることは何かを考えてみる。ChatGPT は巨大なデータの中から、その条件に合うものを探し出し、そして文章に直すという作業を行う。したがって、元データに誤りがあったとしても、それを修正するための手立てを持っていない。著名な小説家などであればそれだけデータの蓄積もあるので可能かもしれないが、大半一般人にとっては、書き手の個性というものは表れにくいということも挙げられる。

これらのことを踏まえると、ChatGPT を使って完成させた文章をもとに、その情報の成否や適否を確かめ、その妥当性を評価したり、その人なりの個性が発揮されたりするような文章に書き直すなどの言語活動が考えられる。または、ChatGPT によりよい文章を書かせるためのキーワードを考えたり、複数の ChatGPT が作成した文章の比較検討をとおして、よりよい文章の在り方を考えたりするというのも国語力の向上に寄与することだろう。

このように、新たな技術の特徴を理解し、それを正しく使いこなすための知識や技能を身に付けさせるということだけでなく、一歩進んで、その技術が不得手とすることを逆手にとって学習に生かす、という発想がこれからの大きな課題になるだろう。

(いちかわよしゆき／札幌市立啓明中学校)